資料室便り

交通の専門図書館　**交通経済研究所資料室**

■新着書棚から（新しく受け入れた資料の紹介）

『1からの交通論』

正司健一，鈴木裕介，朝日亮太編著
碩学社発行，中央経済社発売
2026年3月／2,970円（税込）
所蔵箇所：信濃町

本書は，社会の基盤である交通システムをミクロ経済学の視点から平易かつ体系的に解説した入門書である。第Ⅰ部では需要と供給や市場の失敗などの経済学の基本概念を用いて交通市場のメカニズムを紐解き，第Ⅱ部では鉄道，バス等の各交通モードの現状や，まちづくりといった現代的な政策課題へアプローチする構成となっている。

標準的な教科書の体裁を取りながらも，交通事業者の実情をよく知る著者らによる踏み込んだ視点が示されているのが特徴だ。第1章は運輸事業者や行政，利用者との間で認識がズレがちな，「公共交通における公共性」の意味を問い直すところから始まる。電気や水道など他の公益事業との構造の違いを挙げながら，「公共」という言葉のイメージだけでは解決できない運輸業の特殊性を指摘。採算性と社会的必要性のギャップを誰がどう負担していくべきか，各主体の事情を総合的に勘案した政策の構築と実行の必要性を説く。

初学者向けにとどまらず，持続可能な交通のあり方を模索するさまざまな立場の人にとっても共通言語となりうる一冊である。（原）

■書庫のなかから（所蔵資料の紹介）

「自動運転」に関する図書

［1］『自動運転「戦場」ルポ』冷泉彰彦著，朝日新聞出版発行，2018年7月，所蔵箇所：上野（一般公開中）

［2］『自動運転』樋笠尭士著，交通新聞社発行，2025年10月，所蔵箇所：信濃町

資料室で所蔵している自動運転に関する図書のうち，今回は自動運転元年とも言われる2018年と最近発行された2点を紹介する。

［1］では，2018年前半時点の自動運転車の開発状況についてアメリカを中心に紹介している。デトロイトの既存の自動車関連企業とシリコンバレーのテック系企業の考え方の違い，人身事故に対する世論，技術の実用化の問題点などが紹介されており，混沌とした状況が分かる。そして，自動運転車普及の一番のカギを握るのは社会的認知であると指摘している。

［2］では，鉄道と自動車の自動運転の歴史，現況，今後の展望などをまとめている。自動車の自動運転研究は，1950年にアメリカで開始されたと言われる。日本では，2018年に自動運転に係る制度整備大綱が策定され，制度面での整備が始まった。本書では，SAEレベル1から4の自動運転技術の内容を分かりやすく解説し，レベル5実現に向けた倫理的検討事項も紹介している。

資料室では，2010年代前半以降に発行された自動運転に関する図書を多数所蔵しており，時系列で比較することで論点の変遷が分かる。（古森）

資料室からのご案内

蔵書オンライン検索，新着図書・雑誌の情報，月別新着図書目録，所蔵社史・年史のリストなどは，資料室HP（https://www.itej.or.jp/about）をご覧ください。

担当：古森崇史，原祥太，土方規義，田邊由佳